

1.著者が、この書籍で訴えたかったこと（2013/12/25）

はじめに

2013年4月一般社団法人発明推進協会様から、このままでよいのか日本「特許明細書」を出版させて頂いた。日本の「特許明細書」は、世界で戦える武器となるのだろうか、という素朴な疑問が出発点であった。

読者の反応は様々であった。特許は「言語のゲーム」と言われるように発明技術の全てを文章で説明するには限界がある、という意見を貰っている。即ち特許は「ドロドロ」とした世界であるから綺麗ごとでは特許戦争には勝てないということである。どうやら特許は素人が口出しできるような簡単な世界ではないらしい。

また、この書籍には具体的な解決策が示されておらず、日本の特許明細書を貶めるだけで、実際の仕事には役に立たないという意見も頂いている。この方が求めているのは安易な問題提起ではなく、明確な答え『マニュアル』であるようだ。しかし特許出願の目的は、会社の事業形態や市場等によって各社の考え方が違うのは当然である。これら違いの中から共通事項を見出し、自社の出願戦略の方向性を探ることも決してムダではないと思うが・・・。

著者が伝えたいこと

著者は多くの特許明細書が、なぜ難解なのかという素朴な疑問を持っている。著者の独断と偏見かもしれないが、特許申請側と特許審査官のやりとりに於いて特許申請側の“特許を取りたい”という強い願望からくる「こじつけ」と曖昧な表現が諸悪の根源と考えている。特許審査官は自分の「知識・経験」と、提出された「特許出願明細書」の説明文章で発明技術を理解し、特許要件が満たされているか否かの判断をするしかない。特許申請側と特許審査官の文章でのやり取りの積み重ねが、まるでゲームのようになったのではなかろうかと考えている。

申請者側は、少しでも広い特許権利が欲しいと頑張るのは当然である。しかし審査官は特許要件を満たさない案件に特許権利を与えるわけにはいかない。どうしても特許権利が欲しいということであれば、特許審査官は妥協案(落としどころ)を出してくれる。このやり取りが、「言語のゲーム化」へ進んだのではなかろうか。

問題は、特許申請側と特許審査官とのやり取りに使われる日本語文章である。つまり解釈範囲の広い、阿吽の呼吸で以心伝心を期待した曖昧な日本語表現である。この日本語で、お互いの妥協点を探りながら「こじつけた」文章が、「日本特許村」特有の言語を生みだし、進化(深化)を遂げてきたのではなかろうか。その結果が「日本特許明細書」の「ガラパコス化」である。

日本の強み?であった、この「こじつけ」の技?が、特許明細書のグローバル化で足かせとなってきた。即ち、日本から海外へ出願する「特許出願明細書」の翻訳を通じて「世界で通用しない特許明細書」の存在が露見したという筋書きになる。特許申請側と特許審査官との文章のやり取りが、普遍的な日本語表現で、しかも論理的(ロジカル)に記述(説明)されていれば状況は変わったとおもう。

分かりにくい難解な特許明細書に対して“困る”と思っている人たちは多い。中でも困惑しているのが特許明細書を読む必要性に迫られている現場の研究開発技術者たちではなかろうか。「研究・開発」の現場では“意味不明の特許明細書を真剣に読む気にならない、時間の無駄!”ということになる。「こじつけ」の技で無理を押しして取得した特許が及ぼす悪影響は多方面に及び、その経済的損失は大きく、国益を損なうことにならないか。

どんな技術であっても特許権利を取得にするのが、特許申請側の腕の見せどころという説もあるようだ。しかし著者は、この考えに対して無条件に賛成はできない。何事も行き過ぎは弊害を齎す。例えば、特許法の理念である産業発展の貢献が、むしろ産業発展の妨げにもなるのではなかろうか。

読者から、“最近の特許明細書は改善されている”、という反論を頂いている。確かに改善は成されているが、その数は極めて少数である。このご意見に対して、経験豊かな中国人弁理士と中国人翻訳者に聞いてみた。彼等の言い分は“柔軟な日本語は外国人が理解するのに、とても難しい。正しく翻訳されないリスクは大きい、翻訳者に全ての責任を押し付けられても困る”と。更に“自分たちが習った日本語は一定のルールがあった。ところが最近の日本語は日本語として成立していない、ただ日本文字を羅列したとしか思えない特許文章がところどころに見受けられる。これはとても悩ましい問題である。せめて海外へ特許出願する案件は、他言語への翻訳ができる平明な日本語へ改善されるべき”という忌憚りの無い率直な意見をもらっている。

分り難い難解な特許明細書の存在は日本だけでなく中国にもあるが、少し事情が違ふ。中国は国土が広く多民族の集まりである。コミュニケーションをとるための言語として北京語が使われる。この北京語は米国の英語(米語)と同じ役目でコミュニケーションをとるための言語である。

外国へ特許出願するための原本となる「中国特許明細書」は英語が得意で技術文書の作成訓練を受けた技術者や弁理士が北京語で「中国特許明細書」を作成する。この北京語は英語との相性がよく「中国語⇄英語」の機械翻訳ソフトの支援を受けやすい、と聞き及んでいる。つまり中国から外国へ特許出願される「中国特許明細書」は中国人技術者にとって容易に理解ができる文章になっているのだ。中国語が読めない外国人は機械翻訳ソフトを使って英語へ翻訳すれば、ある程度の理解は可能という。

ただ問題は、自国だけに出願されている特許明細書や実用新案明細書である。これらは自分たちが日ごろから使っている言語で自由勝手に書かれていると思われる案件が見受けられる。つまり優秀な中国人技術者が読んでも理解が難しい特許明細書や実用新案明細書の中には存在している。このように分かりにくい特許明細書は日本だけでなくこの国にもあるようだ。しかし「日本特許明細書」は海外へ特許出願する案件であっても自由勝手に書かれている。「もの、事、考え」を誤解なく明快に伝える言語、あるいは他言語へ翻訳ができる文章を書こうという意識が弱いのではなからうか。

中でも「日本特許明細書」の文書構成は論理的に展開されていないため非常に読みにくい。例えば主語がない、係り受けが明快ではない、とか……。翻訳者は理解を誤り誤訳する危険性が十分にある。「日本特許明細書」から忠実に翻訳した「外国特許明細書」の多くは、理解が難しく惨憺たる状態にあるのは間違いない。

日本から出願された「外国特許明細書」は、外国人には理解が難しく、むしろその曖昧さが海外では武器となる、と言う説もあるようだ。確かにに理解が難しい日本語がバリアになったということは過去にあったかもしれない。しかし特許がグローバル化した現在では、理解が得られない文書は単なる「紙くず」になり兼ねない。では世界へ「物、事、考え」を明快に伝える説明力、文章力を身につける方法はあるのか。その方法はある。「伝わる日本語表現、訳せる日本語表現」つまり、「普遍的な日本語表現」を強く意識して分かりやすい文章を書くことである。

外国へ出願する「外国特許明細書」の書き方の手本は、外国人エリート技術者が作成した「米国特許明細書」を真似る(リバーズする)のが手取り早い方法(学習法)、と思う。

英文特許の研究者である篠原さんの受け売りであるが、米国は国が広く多民族の集まりである。お互いがコミュニケーションをとるための言語として発達してきたのが英語(米語)である。日本人からみれば味気も素っ気も無い単純明快な言語であるが技術の説明には適している。技術はまさに文明である。技術の説明には文才は必要ない。あるがままの事象を明快に書くだけである。つまり「文明言語」で書けば済む。できるだけ文化の色合いを消した日本語、これが「文明日本語」である。

数ある文書の中でも「米国特許明細書」は極めて構造的な文章で書かれている。「米国特許明細書」を参考にして英文構造を習得するのは容易と考える。日本人に不足しているのは論理的に物事を考える論理思考である。論理的に物事を考える習慣が身につけていないために英語が苦手になっているだけである。日本人の学習能力は高いから英文の文書(章)構造に慣れればなんてことはない。伝わる日本語、訳せる日本語を意識し、機械翻訳ソフトの能力を引き出して英語文章に慣れていくのが手取り早い、と。(発明くん&篠原 2013年12月25日)

伝えたいことを、もっと簡単に記すると

- ◆ 申請側の“特許を取りたい”という願望が「こじつけ」の曖昧な表現となる。
- ◆ 申請側と特許審査官の文章でのやり取りが「言語ゲーム」のようになる。
- ◆ やり取りに使われる言語は「日本特許村」特有の言語である。
- ◆ その言語は進化を続け、「日本特許明細書」が、ガラパコス化する。
- ◆ 「以心伝心」を期待した言語は論理的(ロジカル)でない。
- ◆ 曖昧日本語を他言語へ翻訳する作業は極めて困難である。
- ◆ この日本語から「忠実翻訳」した外国特許明細書は惨憺たる状態にある。
- ◆ 即ち、世界で通用する「グローバル特許明細書」になっていない。
- ◆ 世界から理解が得られない文書は単なる「紙クズ」である。
- ◆ 世界へ「物・事・考え」を伝えるには普遍的な日本語表現を意識する。
- ◆ 技術は、まさしく文明である。技術の説明は「文明言語」で記述する
- ◆ それは、できるだけ文化の色合いを消した「文明日本語」である。
- ◆ 数ある文書の中でも「米国特許公報」は極めて構造的である。
- ◆ 「米国特許公報」をリバースすれば良い。
- ◆ 日本人技術者の能力は高いので慣れればなんてことはない。

2. 求められる論理力と読者からの「読后感想」です

我々日本人は、日本文化の色合いが強い情感豊かな日本語と、「物、事、考え」を伝える明確な日本語を使い分ける能力を持っている筈です。ただ、そのことを意識していないだけです。日本人の英語苦手も悲観することはありません。

例えば学習科目によって文章の書き方は違います。理科実験のレポートは「見たまま、ありのまま」を厳密に書くことで、情感が入り込む余地はありません。社会科のレポートは、与えられたテーマに対して、筋道を立てて分析します。そして自分の考えを正直に述べていきます。国語の作文は、情感ある文章で読み手を引き込む文才が求められます。それを鍛錬するのが国語教育です。小中高等学校で、このことを意識した教育をすれば目的に合った文章が書けるようになります。

外国語の勉強は、日本語の特性を理解するには有効と考えています。日本語は「情感」の表現には向いていますが「論理的表現」には向いていないことはお分かりだと思います。外国語の中でも特に英語は「論理的表現」に適した構造をもっていますから論理力を鍛えるには英語を学ぶのが手っ取り早いです。

論理力の基本は「なぜ」を追求することです。にも拘わらず、英語は「なぜ」そのような表現方法をするのか、という学生の質問があった場合、教師は満足のいく答えを与えられるでしょうか。

いま中学、高校、大学(英文科を除く)の英語教育で使われる英語テキストの多くは英語文学書と見受けられます。英語文学書は、英米の文化に深く根差したもので、大学の英文科で勉強している学生には適しているかも知れません。しかし、自然科学、社会科学、といった、普遍文明を対象として使われる英語を修得しなければならない一般学生にとって適切でないと思います。

グローバル社会で求められることは、まず世界との橋渡しができる言語です。橋を渡り終えたら、こんどは日本文化に根ざした日本語が必要となります。世界の人を持つてない、相手の気持ちを思いやる美しい日本語が見直され日本人が尊敬されるに違いありません。そうなるために日本人は、まず第二母語としての「文明日本語」を持つてうではないか、という提唱です。

いま学生の論理力の無さが問題になっています。たとえば理工系大学で使われている英語の教科書に「米国特許明細書」を使う、といアイデアはいかがでしょうか。「米国特許明細書」は極めて論理的に構成(展開)されており、その文章は明快に記述されていますから論理力も向上するはずです。

さらに最新技術情報の宝庫である「米国特許明細書」を読むのに抵抗感が無くなり、世界の最新技術を日常的に学ぶ姿勢がでてくると思います。例え英語が苦手でも悲観することはありません。

英語に転換できる日本語を日頃から意識すれば英語文章の構造が見えてきます。英語文章の構造をしっかりと理解して、英語へ翻訳しやすい日本語を書けば翻訳ソフトの支援が得られます。この繰り返しで、いつの間にか英語が身についていくと思います。(発明くん 2012/09/18)

【お礼】;本書の発行に当たっては、一般社団法人 発明推進協会出版チームの渡邊清隆さんには大変なご指導をいただきました。厚く感謝いたします。

【読後の感想を頂きました①】

アマゾンのカスタマレビューで、この本を読んで得られることは「何 1 つ」無いということで、「星 1 つ」を頂いています(笑)。著者は何が正しくて、何が間違いという結論は求めていません。一人でも多くの方に読んで頂き、「文明日本語」の必要性についての議論が盛り上がることを期待しています。

下記のご意見は、理解ある読者から頂いたメールです。なるほど！極めて分かりや

すく、明快です。これで「モヤ～」が一つ晴れました。励ましをありがとうございます！

ところで、『特許日本語』の存在の件ですが、

- ・解釈論に持ち込むための法的立場重視から始まった技法が、
- ・「何としてでもコジツケしたい願望」に支えられて進化し、
- ・これまで存在し続けることができたのであろう、と考えています。

結局のところ、

- ・「日本国内で、強みを構築する手段として使われてきた技」が、
- ・「これまではあまり翻訳されることのなかった他言語への翻訳」を通じて、
- ・「国際化にあたっての足枷」であると、多くの事例で明確に露見、発覚したということなのであろうと感じております(S:2013/05/08)

【読後の感想を頂きましたー②】

我が社は中国出願で致命的な誤訳をした経験があります。原因を調べたところ米国特許出願も 同じ誤訳をしていました。つまり、「日→英」の翻訳段階で間違っていたので「英→中」の翻訳も間違えたと言うのが理由でした。

ほかの案件も気になって調べましたが、その結果、誤訳の原因は二つあり、一つは翻訳者の技術への理解不足、二つ目は「日→英」の翻訳段階での誤訳でした。後者（約7割以上）の理由が圧倒的に多いのに驚きました。対策として、「日→英」の誤訳問題は根が深すぎるので急遽の策として「日→中」への直接翻訳に切り替えることにしました。

ただし、翻訳者が理解できる明快な日本語で、日本特許出願明細書を書く、さらに不明な箇所があれば必ず聞いて確認を取るという条件をくわえました。

書籍の中で特許文書の構成は論理的に展開されており、文章は論理的に明快に記述する、という行がありますが、共感します。しかし中々難しい仕事ですね。また書籍の中で「日→英→中」の二重翻訳は、誤訳確率が高いと警鐘を鳴らしていましたが、これもその通りです。(H:2013/07/08)